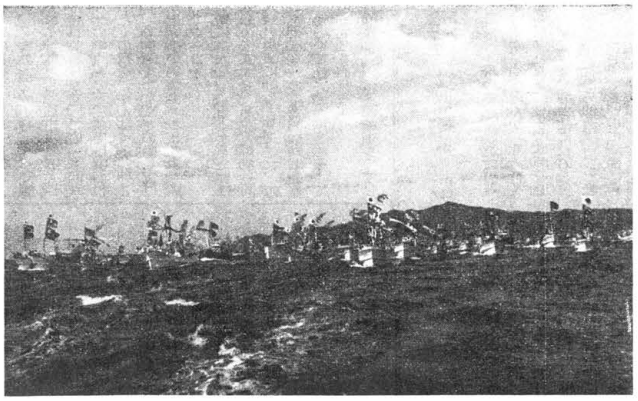
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店　福岡市博多区東公園二一三一（〒八三）
電話福岡（九二）六五一一九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇五）三五一一三三四（代）～四番
三五一一二三四・六〇六番
株式会社　井筒



（写真は前年度海上神幸祭風景）

昭和五十四年度

秋季大祭近まる

――一日海上神幸祭（午前九時三十分）――
一～三日秋季大祭（宗像放生会）

当天社恒例の秋季大祭は穏穂の稔りも豊かな爽秋の十月一日より三日まで斎行される。

この秋季大祭は「田島放生会」と呼ばれ、今から約七百年程前、貞永元年、時の大宮司氏経が始めたものと伝えられている。又、別伝「宗像大菩薩御縁起」によると、「吾れ昔、五千九百余の征神を率いて、二千余万里の風浪を凌いで御長手（旗竿）を振い異国（新羅の国）の凶賊を雪した、是れは則ち国のため、民のためとはいえ、若干の殺罪を犯するところである。よって早く放生供養すべし」との託宣があったと記している。そして仲秋の名月の八月十三日より今月十五日間祭大供養が行われた事を述べている。

又、放生会には宗像三所宮（総社・第二宮・第三宮）の神輿が、御座船に乗り、許斐、織幡両宮の神輿と合せ五社の祭典と共に種々の神賑いがあり極めて盛大な神事が行われたものである。天正年間最後の大宮司氏真の没後、この放生会は昔の如き華かな面影は薄れ江戸時代の初期に入り、唯一神道の興隆に伴い、仏教的な色彩の濃い放生会を廃止し、旧暦九月一日を秋季大祭とした。

しかし古来行われていた放生会の行事は廃止されたもの、「田島放生会」と云う呼び名は依然として生き続け今日に至っている。

又、「みあれ祭」と呼ばれる海洋神事は、今年も十月一日午前九時三十分、大島港を出発、沖津宮、中津宮両宮の御神輿を奉戴した二隻の御座船を先頭に宗像六浦御前の浜（今の宝物館の前）より神湊港まで約十五粁の海上を白波をたてエンジンの響も高々にパレードを行う海上神幸は、将に秋季大祭の幕開けを飾るにふさわしい海上絵巻とも云うべきである。

更に三宮の神輿は神湊を神幸の上、一日午前十二時本宮に着御、秋季大祭の始まりとなる。

――◇――◇――

【御案内】

当天社秋の例大祭（宗像放生会）を下記の通り斎行致しますので皆様お誘い合せの上、参拝下さいますようご案内申し上げます。

昭和五十四年九月吉日

宗像大社社務所

崇敬者各位

漁民の金漁船約五百隻が供奉し、

◇秋季大祭（宗像放生会）◇
お祭りと主な行事

九月三十日　午後五時　辺津宮出御祭
　　午後六時　みなと祭（神湊屯宮）
　　子供相撲

十月一日　午前九時半　大島発御、海上神幸
　　午前十一時　神湊屯宮祭
　　正午　辺津宮入御
　　正午　大祭（風俗舞、浦安舞奉納）

十月二日　午前八時　流鏑馬奉納
　　午前九時　第二宮、第三宮祭
　　午前十時　大祭（翁舞奉納）

十月三日　午前十時　大祭（風俗舞、浦安舞奉納）
　　午前十一時半　宗像護国神社秋季大祭
　　午後二時　献茶祭（南坊流）

※大祭中三日間は臨時バスが運行されます

論説　聖域の尊厳と娯楽
――お言わず様の心――

神話を伝える古典を繙くまでもない。天の岩戸の太古から多くの神社に神楽は祭礼に付きものである。神賑行事として宣伝の目録に上がる。わが国の神祭は賑気を好むとされ、民衆もこれに倣う。

主要宗教の中でも、壮重厳粛を旨とするキリスト教は格別であるが、仏教は長い神仏習合の歴史を持つので、相互のかなりの影響が滲透している故、行事面も共通の色彩のあるのが当然と言える。

キリスト教は厳粛を固執するあまり、一面に強烈な排他性を持つ今日でもわが国では、神仏関係との裕和はない。それどころか神仏関係が好まない方向に、極端にまで尖鋭的抗争態度を見せている。その特記事項の筆頭が靖国神社英霊奉斎問題であろう。

昨今の海外報道によると、ガイアナの米新興宗教団体たる人民寺院入植地の自殺者八百に達している。紅海周辺の諸国で起る衝突事件も、エジプトやイスラエル等との宗教的内情も包含されている。欧州各地殊に伊仏の猟銃大型口径銃で武装したのスキャンダルが、宗教面に関わる不安を露呈しているのである。

ホテル名産それ交通業が、遊覧の客集めに奔走して架橋で繁栄した玄島は漸次賑やかになってきた。天草の乱十字を焼いた官憲は、キリシタンの捜索をますます厳にし、マリヤ観音等の偽装によって摘発を逃れた隠れキリシタンの悲劇の遺跡に遊覧客は増加している。常塔の十字架が輝やく。

次は酒蔵の建ち列ぶ城島、厳かった手造りの時代、仕事の辛さを忘れさせる酒蔵ならではの娯楽が種々あった。ホケマクリ、オリビキヅナなどと呼ばれたもので、現代では若い連中は知らない。

聖域の尊厳保持と、そこに行われる娯楽をテーマとする本論は、副題としてお言わず様と呼ぶ心を取り上げている以上、問題の核心をここに置いて、意義を解明しなければならない。

まさに聖域と言うにふさわしい宗像三女神の田凝姫尊を主神として奉斎する沖ノ島、天照大神の生み給うた三貴神の一柱で、大古から皇室守護列島安泰を使命として御鎮座、神島の面目躍然たるを思えば、恐深お言わず様になってしまう。

行政的には宗像郡大島村に所属するが、北東に四十六キロ離れた絶海の孤島で、大島の住民はもとより一般も神聖な神島として景仰してきたのである。殊に漁民は漁船の安全大漁の信仰が厚い。

一面海の正倉院と称せられるほど四世紀から九世紀にかけてのわが国最大の祭祀遺跡であることも、数次の学術調査によって判明している。出土品は約二万点、うち滑石製品や金指輪など、国宝重要文化財の指定五万点に及ぶ。

海島にも学術的に貴重とされるものもある。

問題は娯楽気分で渡ってくる釣客である。神島お言わず様も現代では聖域たり得ないのかと、関係者を嘆息させる心ない人達の所業である。彼等には神島としての信仰はない。聖域とも思っていないから不浄も無礼も平気であるかに見える。被害も出て困る。

周辺の岩礁が学術的に重視されて海島の特別保護となっていても、釣り客を制止する方策もないまま荒らされる。人目はなくても風波に囲まれても、神島は神恩報謝の聖域である。現代人の平常心向上に期待する外はない。

現代社会に見る人心の荒廃は、聖域に於ける動向にもいかがわしいものがあるが、一概に悪観的に捨てもなるまい。争議反発は聖域の娯楽には原則的にはない。神意を慰める笛太鼓は、同時に神明はお許しで和楽の同感に沸く。そして明日の村作りの道議や勤労の意欲も育つのである。

最近の傾向として、金銭犯罪、智能的殺傷が著しく増加し、心中自殺の驚異的多発が目立つ。盛岡和合とは縁遠い「お母さん死のうよ」と催かす六歳の幼児が悲境の母を死地に誘うニュースは、唖然を越える。社会の異常振り逆ここに極まる。

然し、道手貫（みちぬしのむちゃ）と讃えられるお言わず様の心は、禍を転じて福とする信じたい。心はたえず続けていると笛太鼓の音色の中に抑握したい。

聖域は飽くまで聖域である。観光遊覧の陽気はあってよいが、その聖域の本質を害してはならない。香煙立ちこめる墨岳寺の境内では、浮かれ歌を出させないのが人間の心である。

阿蒙少言

食べ物は人間の生活に最も主要な役割を持っていること、ことさらに挙げつらうものでもない。が、その内容はさまざまである。殊に飲み物の場合、人によってその体質趣味環境など条件が色々に異って千差万別◉酒の好きな者、家庭での慰労の晩酌、時折の職場関係の会食宴会に修練も積んで酒量は上ってゆく。何かの事情から例えば酒の上の失敗が重なり、酒量にブレーキがかかる。時に絶対禁酒の貼紙が掲げられる。然し、この絶対くらい怪しい絶対は、絶対にない◉少言子も昔はよく飲んで、そのために胃を損傷、遂に胃袋全部を取除かれて、今日ではコーヒーに親しむ有様。何でも適度のよいことは判っていても、それが守り難いのが凡夫の浅間しさや言うべし。常職的に量を遥に越して、一日十杯以上◉心筋硬塞の恐れあって病院に顔を出した処、院長は診察室で驚嘆の声をあげた「コーヒーをそれだけ飲む者、私が米国生活で知った来人にもいない。無茶ですよ、一日五杯以下にしなさい」と厳命が下った。これも何ケ月たっても絶対に守られていない◉行きつけの喫茶店で、沸かしたのを飲むのも平日の日課。その前に朝から三杯目にインスタントを四五杯。酒飲みと異ってコーヒーの借金は出来ない。ところが世間は広い。マダムの手帳に借りて記入を続けている常連もある◉常連の異色で、少言子と同時刻頃やってきて、必ずポケットから薄鉢ちくわを一本取り出してそれを噛りながらのコーヒーを飲む。味が格別よいと当人自慰げに話すが、近くの茶店に薄鉢は見かけてもマネをする気にはなれぬ◉「先生は殆んど毎日二用はないのですか」とマダム。週休六日制だが、家に居て孫と暯戯ばかりしていても退屈、旗本退屈男は人に迷惑かけずに生きるのだと釈明する。バイト学生が羨む。（白雲）

第三八回　宗像大社歌会詠草
毎月一日／切　詠草到着順

津屋崎　内田　久美
新しき生命の茅生を培げて来し娘の面嬉し六月の朝

宮田　片山　一
幾程の仏心ありや仏壇の勧誘ありて心傾むく

名古屋　野崎　博三
つづ桶を片辺に置きて海女たちは磯に土用の焚火かこめり

武丸　原田まつ代
前庭に季節の花々炎天に堪えきき映えつ香り漂よう

須恵　早川　フサ
噴き上がる生の交歓が夏の夜を色どりて咲く盆踊りの群

戸畑　田中ハツセ
海神の石柱残るスニオンの岬の石に手を振りて立つ

箱崎　吉村　三郎
雨則けて遠く透を見る宵の窃夏雲

福間　廣渡一寿軒
引きて紅く染めいる

福間　二宮　末子
渇加減を問へば気持よさそうな結構結構と父の声する

福間　二宮　末子
あどけなき面影残り一匹の子等が如何なる罪をおかせしと云う

福岡　扇山美枝子
日曜日大掃除せむと張り切れば若原燥後三十四年経し今日を平和の鐘は広島になる

田熊　鷺津かつ代
白百合を活けた床の一幅を読みなづみつつ花の香に酔ふ

吉留　高山　信子
狭山茶と八女茶それぞれ娘より贈られわれら茶をたのしみぬ

曲　天野トモエ
庭につみ瓶にさしたる墓花に足なが蜘蛛の静かに止まる

武丸　原田　リノ
亡き母の齢を恋ひ六年越えたく弱りしわれと思ふ

香椎　桜井　ツ子
火口瀬にかかれる赤き橋をわたり見返れば高し新緑の中

田熊　吉田　直志
初曾孫をいだけば温みかよい来る黒き瞳の無心に笑ふ

東郷　藤崎　辰子
なげやなく敗きて座りぬ先生の快晴ひしと風呂敷

武丸　立石ろせ乃
孫の話し孫の仕草に花を咲かせ日好日のあしたが始まる

津丸　松尾　豊
かすかなる朝の涼風におたふ草葉を揺す振りて水槽すべる

武丸　立石ろせ乃
花の季何時か過ぎたるかたちの青きと寸間につぶら実大る

池田　永富　臻
爆死せし無縁仏を納めたるみどりの鉄扉はひたと鎖鎖す

原町　八波　五月
落し物はけしき夫が台日を我の眼鏡をかけて本読む

田久　立花　勇雄
鷹席を編まんと思ひ灼熱の太陽の下真荒刈り乾す

吉留　白木うめの
精薄の児等寄り合いて崩るべきもろさに積木つみ上げてゆく

鐘崎　村田　四郎
土用波なき浜叩きて呼吸なかく潮秀のびて素足ぬらしぬ

田島　吉武　武雄
淵となり瀬となり行くや球磨川のガイドの声も朝霧に溶して来る

田島　楠　理
一生を農に尽くすか老人の唯黙々と畑の草とる

深田　中野　節子
今一度み声聞きたい仰ぎ見る先生の遺影の面輪すこやか

田久　小方　実
吾子のクラスのその母親を知るのみとアパートに住む寂が呟く

田久　橋本　良輔
露踏みてゆく長男子の色顕ちぬ姿よきもの隣家に消けむ

津丸　藤田　肇
スーパーに購ふ年配の大方が戦中戦後の窮乏を言ふ

田熊　力丸　一郎
わがうちの小学校の講堂を解体の「プル」炎天に唸る

津屋崎　谷口　礼子
羽衣のきらびやかな能衣裳松の舞台汗一つなし

東郷　田中　春子
手毬歌の文句に習ひ塩梅を三日三晩の土用干しせむ

福岡　林　まつえ
孫の話し孫の仕草に花を咲かせ日好日のあしたが始まる

津丸　松尾　豊
かすかなる朝の涼風におたふ草葉を揺す振りて水槽すべる

武丸　立石ろせ乃
花の季何時か過ぎたるかたちの青きと寸間につぶら実大る

第三回 宗像大社「小倉百人一首かるた大会」開催要項決定

―来る十一月十一日（日曜日）―

来る十一月十一日（日）、当大社に於て、全国の「かるた道」愛好家のための、小倉百人一首かるた大会を開催することとなり、その準備が着々と進められている。

この「かるた大会」は、当大社遷宮記念祭の神賑行事の一つとして、青少年の情操教育、並びに我国古来の伝統文化の護持を目的として、昭和五十二年より始められ、今年で第三回目を迎えます。

当大社の御祭神「宗像大神」は別の御神名を「道主貴」と申し上げ、全ての道をつかさどり、守護される神様として往古より広く崇拝されております。この「宗像大神」の御照覧の下、各自日頃培われたその技をいかんなく発揮され、御神慮をおなぐさめ申し上げ斯道発展の為奮闘されますよう願ってやみません。

特に本大会は全日本かるた競技大会の公式大会であり、規則も同大会の規準に則して実施され、西日本地区唯一の本格的な権威ある「かるた競技大会」にと念願している大会であります。

尚参加要領は左記の通りです。

当大社では多数の参加を期待しております。又観覧は自由ですのでご家族お揃いで来社下さい。境内においては「西日本菊花大会」も開催されております。当日選手達の奮闘ぶりをご覧になり、和歌の道、和歌の心を少しでも認識して戴ければと願っております。

記

名称　第三回宗像大社小倉百人一首かるた大会
主催　宗像大社
協力　九州かるた大会
後援　玄海町教育委員会
　フクニチ新聞社
　FBS福岡放送
　全日本かるた協会
　灘波潟会
　福岡東ロータリークラブ
とき　昭和五十四年十一月十一日（日曜日）
ところ　福岡県宗像郡玄海町
　宗像大社（鹿児島本線・東郷駅下車・東郷東口よりバス八分）

大会実施要項

◇かるた競技種目
・個人戦（五階級）
（いづれも全日本かるた競技規定に準ずる）
A級　三段以上
B級　初・二段
C級　競技かるた経験者（初段を目指す者）
D級　一般の部（含大学生）
　高校生の部
　中学生の部
　小学生の部
　（参加者の都合によって学年別競技編成もありうる）
E級　初心者　チラシ取り

◇参加料
A、B級　一人当り五〇〇円
C、D級　〃　三〇〇円
E　級　〃　一〇〇円
※参加料は当日会場で受付けます。

◇賞
各級・各部共
優　勝　一
準優勝　一　｝賞状並びに楯を贈る
第三位　二
但しチラシ取りは上位五名え副賞を贈る。

◇競技会場
宗像大社境内・宿衛舎
・清明殿
・斎　館
・国鉄鹿児島本線東郷駅下車。西鉄マイクロバスの用意あり（実費各人負担のこと）
・マイカーの方はかるた大会専用駐車場完備。（無料です）
・宿泊希望の方は、競技申し込みと同時に申し込み下さい。（実費斡施いたします）
・昼食は地元の方々の協力で弁当を販売いたします。競技申し込みと共にご予約下さい。（かしわ弁当一人前二〇〇円）
・会場での湯茶設備あり、

◇競技時間
個人戦（各級共）
受付時間　午前九時より
競技開始　午前九時半より
チラシ取り
受付時間　午前九時～十一時
競技開始　午後一時より

◇申し込み要領
官製はがきに
・住所（郵便番号）
・氏名、年令　男・女別
・学校名、学年、又は職業
・電話番号
・参加競技種目
・所属かるた会名
・段位、級の有無
・昼弁当がいる。いらない
・宿の要、不要
等を明記の上、左記へお送り下さい。
尚、かるた協会、愛好会等で多数一括お申し込みの場合は、便箋に責任者連記の上封書でお送り下さい。

・送り先
〒八一一―三五
福岡県宗像郡玄海町田島
宗像大社　かるた大会係
でんわ　〇九四〇六―二―一三二一（代）

・〆切
昭和五十四年十月三十一日（消印有効）
（注）当日の受付は、いたしませんので必ず事前申し込みをおねがいいたします。　以上

【人　事】

権宮司に　宇都宮弴　禰　宜　就任
禰　宜に　宗像清文　権禰宜　就任
―以上九月一日付―

権宮司　宇都宮　弴
社務本局長兼祭儀部長の任を解き社務本局長を命ず
九月一日付

昭和四十七年より空席でありました、当大社の権宮司に宇都宮弴禰宜がこの度、神社本庁辞令（昭和五十四年八月十日付）交付に基ずき、昭和四十五年九月一日付で就任しました。

宇都宮新権宮司は、当大社に昭和二十九年八月一日付で筥崎宮より奉職、同三十一年三月権祢宜、同三十七年二月禰宜に任命され現在に至っています。この間、社内に於いては祭儀、庶務、財政等の責任者として職務に奨励され、昭和大御造営事業完了后（四十三～四十六年）は社務本局長として実質的には権宮司としての職務につき、宮司の補佐としての職責を果してきた。

禰　宜　宗像清文
祭儀部々長兼祭儀部儀式課長を命ず
九月一日付

宇都宮禰宜の権宮司就任に併い禰宜に宗像清文権禰宜が神社本庁辞令（八月十日付）交付に依り九月一日付で就任しました。

宗像新禰宜は昭和四十二年四月権禰宜として太宰府天満宮より当大社に奉職、中津宮奉仕の后、同五十一年三月祭儀部儀式課長に就任現在に至っている。

第七回 夏期雅楽講習会を開催

―県内神職も参加―

炎暑の中、第七回雅楽講習会を去る七月二十三日から三日間、勅使館に於いて行った。

例年により園広育宮内庁楽長補秋山孝行乃木雅楽会楽長と、新たに藤島乃木雅楽会舞楽指導者を講師として、迎え今年も筥崎宮、香椎宮、太宰府天満宮より神職多数の参加があり、連日熱心に受講した。

本年度は特に祭祀舞（神社本庁選定）豊栄舞を中心に指導が行なわれた、独自の神楽をもたない当社では、従来の浦安舞と平行して、ポピューラーな豊栄舞を私祭神楽に奏してはとの意見があり、今後の研究課題とされた。

また、祭祀雅楽のより一層の充実を計る為、今年行われている、神社本庁主催雅楽指導者講習会に一昨年より福岡県神社庁の推薦を受け、当社神島権禰宜を神社本庁に派遣、今年も八月四日から四日間、同権禰宜は宮内庁安倍季昌楽師の指導のもと、篳篥の技を学んだ。

残筆しがらみ草紙　玄陽隠士 (33)

怪談よじんべ

温泉地へ誘っても、なかなかみ輿のあがらぬ婆どんが、仙台行を持ち出すと直ちにOKで準備を始めた。この春、油会社に勤める次男が東京本社から仙台支店に転勤、しかもまだ若いのに課長に昇進とあって、婆どんにはその祝意も十分にある。孫たちに会いたい期待は言わずもがな。

七月は昔からわが家にとって嬉しくない出来事が起る。東北地震の報道に驚いて航空券の予約取消し、度々忰と電話で安否を訊ね、その都度孫たちとも受話器面会、元気な声に安堵していた。

学校は夏休みに入る。老骨も出講がないので、温泉の中でも最も好感を持つ由布院に誘ったが、仙台挫折でみ輿はあがらぬ。正月以来何度目かの由布岳高原に、単独で夏を楽しむ。四五日滞在中に新聞雑誌に載っている新天地を訪ねる。バスで何キロか走り山奥にも、若い人たちの姿を見かけるのに驚く。

話は好きな由布院に飛んだが、この辺で東北筋に戻らねば「よじんべ」の怪談が引き出せない。九月になって板付発仙台直行便で発つ。空の旅といっても僅か一時間四十分しか飛んでいない。

空港には嫁が自ら車を運転して出迎えてくれた。孫二人も来ていた。ロビーで茶を飲んで市内に向ったが、東京や大阪ほど時間がかからない。好都合の地方都市、東北数県の元締的で権威も備えている。伊達政宗の天下の志空しく東北の雄として自重した歴史が思われた。

宿舎は市の中心部大通りに近く幼稚園が傍に見えて婆どんは地の利も喜んだ。この地の利をあまり喜ばないのはパパで、会社に距離短く帰途ブランデーに寄れない。嫁は気をよくしている。

新しい観光地が全国的に開発されつつある今日、日本三景の松島の呼称は古臭い感がある。学生の頃塩釜神社に夏休みのアルバイトに来たことがあって、曽遊の地と言うわけだが、五十年の星霜は当時の記憶を霧散している。

案内されて瑞巌寺の山門を潜る。山門までの石畳が分けた両側には、土産物店が列んで客を呼んでいた。本堂に向って左右に、臥龍梅二基が目につく。左が白、右が紅、その背後に「よじんべ」と平仮名横書きの立札、前に立った四五人の少年が、よじんべとは何かと不審な声、便所を知らせているのだと大人が説明しても、納得のゆかない様子である。時代の新旧の見本をここに表現したのか。

左読みの少年、古い右読みを捨てない禅寺。少年は欧米語横文字の中に成長し、禅院は伝統護持に面目を生かす。共に道に生きねばならない。殊に禅道の面目を捨て、観光僧の時代迎合主義に堕すれば、極楽道の妙諦は遠のく。

「よじんべ」と読まれる危険はあっても、風眼を以って観ること勿れの師家の教を守り通すべきである。瑞巌寺の師家に敬意を表して退去する。

五十年前の塩釜神社アルバイトは、主として県内神職子弟を集めての講習会の指導であった。時折宮司に訪問客が来る。名勝地にある神社は、夏休みなど特に遊覧旁々の来訪を覚悟しなければならない。宮司も誰ともお付合いの松島見物も出来かねる。三度ほど接待役を代行してモーターボートで走り、ご馳走にありついた記憶だけが残っている。

忰は蔵王山頂にも案内してくれた。勿論嫁や孫も同乗した。日和が聊か悪かったが風景は印象的だった。会社の蔵王寮にも一夜お世話になった。従業員の慰労休日を特に支店長の扱いで厄介になることが出来たのである。

九月十六日は老骨の誕生日で、忰たち計って記念品をくれた。仙台の三越デパートで腕時計を老骨に選ばせたのである。

酒は全く飲まない今日だが、愉快になると唄を口ずさむ癖がある。稗搗節や愛染かつらが出る。またも鳴るかや未練の鈴がの一節、愛情の残影は人間的であるが、未練なく別れる夫婦は動物的であろう。もともと人間の結婚はしていない。未練は真に人間的である。

胃ガンと知らされた宗像郡内のKさんは、自分の意志で内服薬を拒否した。末期を迎えても、いつ死ぬかは医師にさえ判らない。英米では宗教者が末期患者を見舞う。わが国で僧侶がベッド傍に座ったら「縁起でもない」と渋い顔。縁起はよいのだ、人生の最後を未練たっぷり語るがよい。

神湊（こうのみなと） (89)

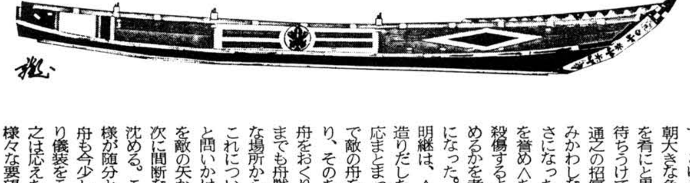
楠早鳥　作
福田長庵　画

楫陰（その三）

祭礼の終った秋の一日、明継は大島へ渡る舟の人となった。櫓のきしみにつれて左右に揺れ動く舷側に身をもたせかけて左に勝島、右に地島を見やりながら想念にふけった。

軍船（いくさぶね）は今のような型で果たしてよいものであろうか、普通の荷舟や漁船にはない使用目的があるにもかかわらず、実際に用いているのは合戦になって徴用するこれらの舟である。倭冦の連中はどうか、彼等も同じ舟を用いている。先年、赤間関で大勝利をおさめた舟戦さも所詮計画が適中しただけのことでしかない。己の舟戦さについての戦略は三国志の時代から一歩も抜んでてはいない。自ら海賊将軍と豪語する村上義弘の水軍にしても、ただ操船技術の秀れた水夫と舟数を誇っているに過ぎない。戦闘能力を考えてもせいぜい舷側に楯を並べてその蔭から矢を放つ程度で、接近すれば相手の舟に乗り移り刀で打合いをする。これでは船は単に戦士を相手との戦闘距離まで運ぶ道具にしかすぎない。このような海戦をいくら続けても所詮「人と人との戦」で「船と船との戦」にはなりようがない。海の戦さで勝利をおさめるというのは敵の船を葬ることではなかろうか！その方法は明継の考えがそこまで思いおよんだ時、舟は大島の浜に到着した。迎えに出ている河野通之と家人たちに挨拶をし案内をされて通之の居館に赴いた。

〈島に着いたのもわからぬくらいえらい考えにふけっておられたが何事かな、御妻女の容態でもお悪いのか〉心配気に問いかける通之に、舟の中で考えていたことを残らず語り〈貴殿ならこれをどうする。〉と尋ねた。〈そこまで深く考えたことはないが戦さの仕方にもう少し工夫がこらせないかと思って先般話したように、新しい舟を二艘ばかり造ってみた。是非これを拝見していただこうと思いわざわざ来て頂いた。〉と言って家人を呼び邸の前面の海に舟をひいてくるように命じた。〈機略従横の貴殿でもなお工夫をこらさねばならぬとは、さても合戦とは難しいものよ〉と愉しげに笑う通之の言葉に明継の頭脳は触発されて〈合戦とは敵よりもより合理的な考えをした方が勝つ、寡兵よく大軍を制することが、間々あるのはこのためだ。〉とひらめいた。舟をもやいましたと告げる家人の声に立ち上り二人は浜に出た。〈ほう！この舟は〉と明継が感嘆の声をあげた。海には赤と黒の漆で彩色し中ほどに宗像の楠葉の紋をうった舟と、普通の荷舟に板をさし渡した恰好をした舟が浮んでいた。通之の説明を聞くと、舟の長さ七尋（一〇、五米）幅七尺、八丁櫓をもって矢のように海を走ると言う。速力に重点をおき工夫をこらし船体を細長くし、水の低抗を少くするため漆を塗り表面をなめらかにした。またみよしは全て鉄板で覆い衝撃を強くしたと言う。今一つの舟は、見た通り二隻の荷舟に板をさし渡した簡単なものだがこの板の上に駒繋ぎの柵を立てると一度に六頭を運べ騎手も共に乗せられる。理屈どおりにやれようかと思って試みたところ未だ一頭分ほどの余裕があったと結果を述べた。〈帰りは飛船で送らせるので、ごゆるりと過されよ、実は今朝大きな魚を釣りあげてな、これを肴にと思い貴殿の来られるのを待ちうけていたのよ。〉館に戻り通之の招宴をうけた。互に酒をくみかわしながら話はいつしか舟戦さになった。通之は赤間関の戦略を誉め〈あの時以来、海戦は人を殺傷するよりも敵の舟を如何に沈めるかを考えるべきだと思うようになった。〉と語ったのに対して明継は、〈先刻来の考えが貴殿が造りだしたあの二艘の舟をみて一応まとまった。先ず速力のある舟で敵の舟を襲い合戦の末これを葬り、そのあとに馬匹、兵を載せた舟をおくり込み上陸させる。あくまでも舟戦さは陸上の合戦を有利な場所から挑める手段にしたいがこれについて如何思われるか。〉と問いかけると〈味方の舟の漕手を敵の矢から衛ることがまず肝要次に間断なく火矢を射かけて焼き沈める。これだけでも舟戦さの仕様が随分とちがって参ろう。あの舟も今少しそこらあたりに心を配り儀装をこらしてみよう。〉と通之は応えた。これについて明継は様々な要望を述べ必要な経費は、支弁することを約した。



帰りは夜になった、通之の話の通り船は矢のような速さで疾走した。〈なるほど飛船とはよく名づけたものだ。〉明継は一人合点をした、波しぶきが月明に照らされて白く光る。酒にほてった頬をなぶる風が心地よい涼しさをあたえてくれた。

県立普通高校 福間町に新設決定
—昭和五十六年四月開校—

〝宗像に高校を〟と宗像郡民挙げて実現を目指していた「県立高等学校の新設」が県の昭和五十四年度予算編成の中で、「普通科高校」として本郡の福間町手光に建設、昭和五十六年四月開校と決定された。

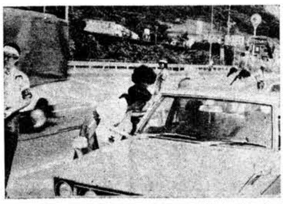
現在、郡内には県立宗像高等学校と私立の東海大学附属第五高等学校の二校（共に男女共学）、県立水産高等学校があり、ここ十年間の間に郡内の人口が二倍に増え、中学校も八校（宗像三、福間二、津屋崎・玄海・大島各一校）と二校増え、収容生徒数も増加して校舎増築等をしている。それと共に進学率も一〇〇%近くに達しているのに、高校の受入体制は前述の通りであり、多くの家庭で郡外の県立高校へ通うという不便さである。

この為、去る五十一年に県教育委員会が発表した「公立高等学校新増設計画策定にあたっての基本方針」を契機に、一速く設置の誘致運動を展開したのであるが、本郡には既設の高校が三校あるという理由から退けられ、粕屋郡（新宮町）に決定した苦い経験を基に、同年十一月、郡内五ケ町村が衆議一決して「高校誘致期成会」を発足、以後今日まで積極的に誘致運動を展開、ようやく陽の目をみたのである。

この度、決定された福間手光の予定地は、旧国道三号線の東福間・若木台団地に隣接して、西部不動産が団地造成を計画している土地の一画（約六万平方メートル）で、国鉄「東福間駅」に近く、交通、環境と抜群の最適地に建設される。新設校の校名は未だ決まってないが県教育委員会の最終的な計画では、一学年一〇学級の三〇学級規模をもつ、あらゆる最新施設を完備した高等学校となると言われている。

この新高等学校開校によって郡内に県立普通高校が二校となり、郡内子弟の高校進学の経済的、通学的な問題が解決するだけでなく古くから教育郡宗像として県内外に知られ、多数の秀れた先達者を輩出して来た宗像高等学校と共に、新しい校風をもった高等学校として一段と教育宗像の名を高めることを期し、願うものである。

国道三号線城山峠で 夏の交通安全キャンペーン
—お盆帰省の車輌にお守札と安全ステッカー授与—



お盆を郷土で過ごす人の帰省移動が始まった、八月十一日、十二日の両日、宗像郡宗像町城山峠の国道3号線下り線に於いて、十時から十二時までの二時間に亘り交通安全運動キャンペーンが行われた。

この行事は、宗像大社とフクニチ新聞社との主催で、交通事故をなくす福岡県民運動本部、福岡県警察本部、福岡県交通安全協会、日本自動車連盟（JAF）九州本部、宗像警察署の後援、協力を得ての夏の交通安全運動キャンペーンで毎年同場所で実施している。

本年で六回目を迎えた、この行事は「盆帰省ドライバーに対する交通安全サービス」・「子供を交通事故から守ろう」・「シートベルトを着用しよう」以上の三点を重点的に展開しようというもので、当日現地に総数三十人が集合、宗像署交通巡視員が交通整理をするかたわらで、「お疲れさま。シートベルトはしていますか。どうぞ安全運転で！」と緋袴の巫女さんが差し出す交通安全のお守と、冷たいオシボリに、暑さと長距離ドライブで疲れたドライバーも思わずニッコリ。

しかし今春、九州自動車道黒崎〜若宮間が開通し、山口県から熊本県まで高速道路によって一直線に連結した、が為に三号線の関所城山峠を通過する車は「北九州」「福岡」ナンバーが多く、例年千数百台の他県車が通過したのにくらべて今年は二日間のキャンペーン中数百台と激減した。

又日本自動車連盟からは、各車の無料点検サービスがなされ、ブレーキランプ・フラッシャーランプの不良がめだち、係員も汗だくで点検サービスにあたった。

尚このキャンペーンには、宗像大社より交通安全のお守と安全運転ステッカー、フクニチ新聞社から冷たいオシボリとキャンデー、交通安全協会・JAF外からは、子供向け交通安全絵本・シートベルト着用啓蒙パンフレット等が準備され、各ドライバー、同乗者に交通安全を願いつつ手渡された。

信仰

祝詞（のりと）

神に対して申し上げる言葉を綴った文章と解するのが普通である。

しかし「のりと」とは「のりごと」「のりとごと」の略とか、または「のりときごと」の略だとか種々の説もある。

いずれも神を対象としている点は共通である。しかし神を対象としないという見方もある。それは神の意志 —すなわち「のり」を宣言する「ところ」という意味だと解するのである。

もともと「まつり」の目的は神の意志・要求・命令を知ることにあったので、「のり」をうけたまわることが最も主要な部分であったが、その「のりを」を知る力（或は技術）が衰えて、ただ一方的に「いのり」を捧げるだけとなり、「のりと」は祈願文のようになってしまった。

祝詞の形式には文末が「諸聞食止宣（もろもろきこしめせとのる）で終る宣命（せんみょう）式、「称辞意奉久登白（たたえごとおえまつらくともうす）」で終る奏上式との二種がある。前者は明らかに「まつり」の参列者を対象としている。また祝詞の内容が「延喜式」（巻第八）に収められているように固定してしまったのは、讃美・祝福・祈願を目的としてからのことで、本来は一定したものでなかったのが当然である。しかも神の要求・命令などに対する承諾・誓約など、いわば「返答」の部に属するところだけは、内容も固定して形式化したのであろう。

「延喜式」に収められているのは、祝詞・寿詞・祓詞など二十七篇であるが、その一々の製作年代については種々の説があって定まらない。しかしその文学的技巧は日本上代文学の高い水準を示すに足るものといわれている。なお地方にも神の託宣及び神への祈願の言葉を綴った文章が残されていたようであるが、これらは多く口伝され、記録化されなかったため完全な形で捉えにくい。

神職（しんしょく）

普通には神職というよりも、神官とか神主（かんぬし）とかいう場合が多い。明治二十年（一八八七）以後の制度では、伊勢神宮に奉仕するものだけが官吏であったから、神官と称し、その他のものは神職と称せられた。そして神主というのは公式の呼称でないとされていたにもかかわらず、一般的にはやはり広く通用していた。

「神主さん」とか「祢宜」（ねぎ）さんとか「大夫さん」とかいう呼称は、もともと敬愛の情を表わしたものであったが、信仰の衰えた地方では、それは軽蔑の意味を含むようになった。

東九州から南九州にかけて「ほいどん」とか「ほつどん」とかいう呼称が残っているが、それは「はふりどの」（祝殿）の意味であった。これもしまいには尊敬の意を持たないものとなった。神をまつる場合、先ず「みそぎ」「はらい」が必要であったが、祝（はふり）は修祓にあたるもので、重要な役であった。次に祢宜（ねぎ）は願いごとを立てる役であり、神主（かんぬし）は神の託宣をつたえる役であって、このように役割を分担するのが最も厳格な姿であった。

大化改新の後、神祇制度が確立されてから、直接祭祀にたずさわるものよりも、事務をつかさどるものの方が重く見られるようになった。宮司（ぐうじ）という職名は神社の経営・造営などに専当するものを意味したのであるが、次第に実権を握るようになった。この系統には社務（しゃむ）とか預（あずかり）とか称せられるものもあった。

× ×

町の話題
（各町々報より抜萃編集）

庁舎建設 本格的に取り組む —福間町—

福間町の役場庁舎新築計画が、昭和五十五年度着工、一〜二年の工期で完成と本格的に決まり、この程、「庁舎建設部会」（役場内関係課長で構成）による、鳥栖市＝佐賀県、新宮町、篠栗町＝粕屋郡の庁舎視察を実施、各庁舎の利点、欠点等を鋭意調査して帰福しました。

現在の庁舎は、昭和四年に建てられた木造二階建で、建物の老朽化が進み、雨の日などは雨もりから書類を守るのに苦労し、建具等のヒズミもひどく、床、天井、壁等の脱落も多く、又、近年の人口増加にともなう仕事量の増大、職員の増員等で事務場所の確保も困難となり建て増しによって急場をしのいでいる有様で、行政機能の中枢として充分の働きも、又住民サービスも低下を来たし、内外より一日も早く改築をとの声が年々高まってきていた。

国道三号線沿いの町の庁舎はどこも新しくなり『古屋のもり』的な威厳？のある庁舎は、隣の津屋崎町と同町だけとなっている。

〝お嫁さんからダンスを〟 嫁と姑で「睦会」を結成して十二年 —津屋崎町—

「嫁と姑の確執」この新しくて古い問題を、地区ぐるみで見事に解決しているのが、津屋崎町勝浦校区塩浜掘切組の十二戸の嫁と姑で結成している「睦会」の皆さんです。

この「睦会」は、昭和四十一年に、当時組内の二、三戸の家庭に於いて嫁と姑の仲たがいが起り、組内全戸の嫁は嫁側、姑は姑側に結束して対立、隣組全体が過中に巻こまれるという事態が発生、この時、組内の井上ヨネさんが、一日も早く解決するよう双方に呼びかけて、集団話し合いの場をもうけ、解決したのを契機に発足したのが「睦会」であります。

以後、毎月一回集まって、嫁の意見、姑の意見を自由に述べ、問題等があれば全員で十分に話合い、問題によっては講師を招き全員が納得のゆくまで話し合ったり、嫁さんは家族関係、子供の育て方、経済の持ち方、地区の昔からの慣習等先輩の体験を通した意見を聞き、又、姑の方はお嫁さんからダンスを習ったり、現代の若い人の考え方等を学んだり、自分達の昔話を聞せたりと和気合々に今日まで一月の欠会、欠席者もなく開催され今年で十二年を迎えることとなった。

現在は会の運営方法の一つに、月毎の実行課題を設け、今月の課題は明るい町づくりに結びつけて家庭内での「あいさつ」を努力目標に明るい家庭作りに努めている。

尚現在の会員は、上は八十三歳のお姑さんから、下は二十三歳のお嫁さんまで、全戸（十二戸）二十四名の会員となっている。

〝ゆかたコーラス〟で暑気払い サマーコンサートⅡ 合唱の夕べ開催 —宗像町—

宗像女声合唱団・宗像少年少女合唱団による、サマー・コンサートⅡ「合唱の夕べ」（宗像町教育委員会後援）が暑さも絶頂の去る七月二十九日午後七時より、中央公民館大ホールに於いて開催された。

宗像女声合唱団は町内の音楽好きのママさんがたが集い今年で結成三年目を迎え歌唱力はプロ並の実力を有する迄になっている。今回はシュトラウス作曲の「美しく青きドナウ川」他三題を、元岡重夫氏指揮のもと美事に合唱、又、宗像少年少女合唱団も今年で結成二年目を迎え、今回は岩川三郎の組曲「祭と子ども」を歌い、親子による競奏合唱に場内は暑も忘れ聞きほれていた。

今回は、東福間団地ママさんコーラス、日の里児童合唱団が特別賛助出演を行い一段と盛況な「合唱の夕べ」となった。

特にフィナーレを飾った、宗像女声合唱団による「津軽海峡冬景色」「女ひとり」「瀬戸の花嫁」の歌謡曲三曲の合唱は、指揮者の元岡重夫先生をはじめ、団員全員が「ゆかたに素足下駄ばき」スタイルで、美しいハーモニーを聞かせ、満員の会場から大きな拍手が送られ、二時間におよぶ熱演の「合唱の夕べ」は好評裏に終演したのである。

離島のハンディ見事克服 県下で初の一〇〇%上水道普及間近か —大島村—

昭和四十五年より開始された同村簡易水道事業は、岩瀬、津和瀬地区を除く、九十六%の家庭に給水を行ない、昨年の大旱魃期も離島にもかかわらず、他町村で水問題で大騒ぎしたのに同村では充分に乗りきり、早くから水資源確保に力をそそいできた努力が実を結んだのでる。

現在、未給水地区の岩瀬、津和瀬両地区については、地理的、対象戸数の限度等で事業ベースに合ない面が難点となっていたが、事業予算面の見通しもつき、昭和五十三・四年度で総事業費三三、〇六二千円で両地区の給水施設工事を実施してきたがこの程、岩瀬地区分が完工し、津和瀬地区の完工も間近かとなっている。

両地区の給水施設が完工すれば同村は一〇〇%の上水道普及率となり、生活環境の最も重要な電気と水の供給体制は完全なものとなり、同村のキャチフレーズである「住みよい村づくり」の目標にまた一歩前進したのである。

町無形文化財指定「主基地方風俗舞」福間町に於いて上演 —玄海町—

第五回目を迎えた宗像郡郷土芸能の発表会が去る八月十八日夜、本年は福間町神興小学校運動場で開催された。

この催しは郡五ケ町村と西日本新聞社主催で主として宗像郡に伝わる個々の芸能を通して交流と文化の向上に寄与することを目的としたものである。

ほぼ運動場の中央に設けられたやぐら台を舞台として会場内は約千人の観客で溢れ、露店も立並んで、郡内より六団体、郡外から二団体が出場、演技が発表された。

当社から昨年に引続いて、大社保存による古式豊かな、「主基地方風俗舞」が花を添えた。これは現在玄海町無形文化財に指定された神楽舞であり、全国でも珍らしいもので、地元玄海町田島青年団の奉仕により披露されたが、観客は、ゆかた姿の人も混じって伝統芸能を堪能し盛んに拍手を送った。

その他種目内容は左記の通りであります。

○郡内の部
東福間音頭（福間町）
小烏（こがらす）太鼓（〃）
福間浦の盆踊り（〃）
山田の口説（くどき）（宗像町）
城ケ谷の盆踊り（宗像町）
○その他
石見神楽（いわみかぐら）（島根県）
納祖太鼓（飯塚市）

宗像大社歌会 俳句作品集(三〇〇)

辺津宮や稲穂の果ての大鳥居 藤沢 玄洋子

庭畑雨に洗われ茄子の紺 福岡 入江 柳江

糠味噌を頼みて遠く妻墓参 福間 廣渡 一寿軒

維新の士此処に眠むるか萩城下 福間 二宮 未子

秋立つやテレビを見つつレモン飲む 土穴 八尋 恒夫

石蹴りて人待つ乙女秋灯下 名古屋 野崎 傳三

夏草も秋草となり羊雲 田熊 力丸 一郎

水すまし紅水連に偲び寄り 田島 吉武 武雄

浜の寄物 (25)

軍艦出雲—ある巡洋艦の生涯 (五)

いしいただし

ウラジオを目指すバルチック艦隊にとって、日本海へ入るためには、対馬海峡を抜けるか、長い列島を大きく迂回するかの二つの方法しかない。前者がウラジオへの最短コースである。

連合艦隊はどちらにせよ、バルチック艦隊を捕捉し決戦に持ち込まなければならない。そのために実に一二五隻の艦船を配して索敵に懸命であった。

五月二十七日、補助巡洋艦信濃丸(六三八七トン)は五島列島沖で、航行中のバルチック艦隊を発見、確認後「敵ノ艦隊二〇三地区ニ見ユ」の暗号無電を発した。バルチック艦隊は針路を対馬の海峡へ目指していたのである。

その時、三笠を旗艦とする第一艦隊、出雲を旗艦とする第二艦隊は朝鮮南岸にあり、第三艦隊は対馬方面にあった。

「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ、連合艦隊ハ直チニ出動、之ヲ撃滅セントス、本日天気晴朗ナレド波高シ」全艦出撃準備が整い、バルチック艦隊との決戦がいまここに来たのである。

さて日本海海戦に一水兵として参加したノビコフ・プリボイ(一八七七年ロシア・タンボク県生、一九四四年死亡、多くの海洋物を残した)は有名な「ツシマ」を書いた。これは第一回スターリン賞を受賞したもので、邦訳は「バルチック艦隊の潰滅」上脇進訳、原書房から出版されている。膨大な資料を縦横に駆使した戦記文学の古典と呼ばれる傑作である。ここで、ロシア側の動きはプリボイの本から引用する。

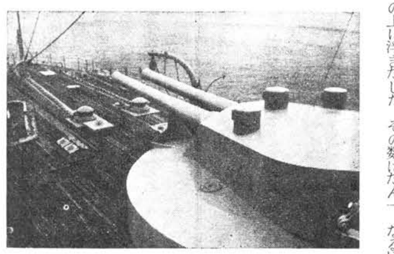
『敵艦隊の主力がぼんやり水平線の上に浮きだした。その数はだんだんふえてきた。そして、わが艦隊の針路を横切るように、単縦陣をもって進んでいた…中略…雲が切れて太陽の光が五、六分ほど海面を照らした。敵の艦隊はだんだん近づいてきた。わが艦の士官たちは敵の艦型を見極めようと骨折った。誰だか嚮導艦を指して、びっくりしたように叫んだ。

「見たまえ、戦艦三笠だ!」

「そんな筈はない、三笠はとうのむかし沈没した筈だ」

「じゃ現われたところを見ると生き返ったというわけか」

なるほど嚮導艦は、東郷提督旗を掲げた三笠にちがいなかった。戦艦敷島、富士、朝日、および巡洋戦艦朝日、日進などがそれにつづいた。その後から六隻の巡洋戦艦がやってきた。上村提督旗を掲げた出雲、八雲、浅間、吾妻、常磐それに磐手など。前甲板には水兵たちが、不安そうに敵艦隊を眺めながら、あちこちに集まっていた』



はるばる北欧の港から航程一万八千浬、七ケ月の大遠征、幾度か日本艦攻撃のうわさに脅え、ウラジオ・旅順艦隊を屠った日本艦隊を眼前にして、ロシア将兵達の胸中はいかばかりであったろうか。

もう少し記述してみよう。

『陣形をきちんとしているのにはまったく驚嘆しないではおれなかった。全艦隊がまるで、大きな一つの機械のように、命令のままに動いているようだった。一五・六ノット以上の速力は出ていなかったろうか、この軍艦の一団が多くの煙突から煙を吐きながら、怖るべき快速力で海いっぱい駆け回っているような印象を受けた』

註 二四号で「上村将軍」について上村将軍自身の作詩みたいに記述をした。作詩は佐々木信香、作曲、佐藤茂助、作詩者は上村将軍との同郷の鹿児島県人。民間でつくった明治軍歌は珍しいという。

註 「尉山沖の海戦」という映画が昭和三年七月、日活で製作。海軍省後援、舞鶴要港部援助。原作は海軍大佐杉本幸雄、総指揮を海軍中佐古田中博、撮影監督は東坊城恭長、秋本松一、演出溝口健二、中野英治、島耕二等が出演。

註二対島海峡を韓国では大韓海峡と呼んでいる。釜山・対馬を西水道、対馬壱岐を東水道と区別する方法である、バルチック艦隊は東水道を目指していた。

鐘崎民俗誌 その十六

楠本記

釣漁(その三)

「釣のことはあんまりわからんがええじゃろうか。」と前置きして花田国五郎さん(明治二十八年生)は話し始めた。

ー大体むかしから鐘崎の漁は網が主じゃった、釣は十軒くらいでやっておった。五、六尺かたくらいの船に三、四人乗って大島の沖から沖ノ島近くまでいって釣る者もおれば、小舟は地ノ島の周囲とか地廻りの瀬で釣っておった。今はダマシ(擬似餌)で釣るけ、いつでも釣りができるが、むかしは餌とりからやっていた。

春の終りから夏まではサバ釣が盛んじゃった。梅雨サバと言うて夜中に火をたいて獲っていた。明治の三十年代は舟の外にヒジ(腕木)をだし鉄の籠をぶらさげて、中で石炭を燃やし、その光に集るサバを釣っていた。魚あつめのあかりは、わしが知っとる間だけでも、石炭からランプになり、それからガス、ガスから電気と変っていった。親父の時代は薪を炎きよったげな、いまのごとある明い燈は想像もつかんじゃった。サバ釣は、まず烏賊をダマシで釣り、釣りあげたイカの皮をはいで身を白うして、それを三寸ほどのタンザク形にして釣りよった。サバがかかると、のちにはサバの身を餌にして釣った。これをドシヱサと呼んでいた。

春から夏にかけてはスズキ釣をやっていた。潮の流れの上手の方に碇をやって(下して)活きたカナギを打込んでエサにして釣っていた、カナギがしまえりゃエビで釣った。

それから夏にはエソ釣をやっていた。始めはニワトリの羽毛をダマシに使っていたが、のちにはゴムをちいそう切って水の中でひらひらさせて釣っていた。おもに大島から勝島の間くらいが漁場じゃった。

秋になりや小鯛釣、活きエビを餌にして釣ったが、あのころは魚がよっぽど多かったんじゃろおう一度スジをあげると海の中からタンザクがあがるごと釣れよった。あの七夕様の時に笹につけるタンザクよ、うんとついとろうが、あれのごとひらひら、ひらひらあがって来たものよ。

水イカ釣道具

秋が過ぎりゃあ冬、冬の釣はブリつりたい!餌はサンマやイワシをとって塩づけにして、スジを海の底、中、上と三通りくらいに仕掛けて釣りよった。氷ができたってからは餌は氷づけにしたが、それまでは塩づけ、ス板をはずして大けな樋に何ばいもいれて釣ったものよ、大けなブリがかかったもんじゃったが、鯛も一本釣でとる大鯛は太かった。今は魚なら何でも売れるが、むかしは値のせん魚は捨てよった。小鯛は夜なべでイロリのふちで浜焼にした。大漁しても売りさばくのがおおごとじゃった今は便利になったものよ。ー

国五郎さんの話を聞いて鐘崎の釣漁の記録を調べると、筑豊沿海誌には、鐘崎の漁業の主体は網漁であると書かれ、釣漁はー小鯛の一本釣・目下盛に行わる。その起源を、明治二十五年の頃とす。ーと述べている。この本が編纂されたのが大正六年であるので、小鯛釣が目下盛に行われていた時期は国五郎さんが二十三、四才の頃であったろう。この記録によってもー海の中からタンザクがあがるように釣れた。ーという表現が誇張でないことがわかる。

また昭和三十八年に福岡県が行った「民俗資料緊急調査」には、花田栄次郎さん(当時七十八才)が鐘崎の釣漁は

四月ー七月 いかつり、さばつり
八月ー十月 さばつり
九月ー十一月、一本づり(たい、ぶり)

であると語っている。

寛政十年(一七九八)に大阪の人、平瀬補世があらわした「日本山海名産図会」を繙くと、筑前宗像では鮪漁が盛んであると書いてある。網でとったのが主であろうが、釣の方でマグロがとれたことがないかと思って尋ねてみたが、「ーマグロも釣れたことがあるばい。ー」というような話で、普段ここらにはいない珍魚がとれたという表現の仕方である。おそらく寛政から明治に至る凡そ百年のあいだに、マグロの回遊系路が変化したものであろう。

大島、沖ノ島で行われたブリの撫釣(註一)の話がないのは、ブリが陸地近くまでこなかったためであろう。また長崎県で行われているカツオ釣も鐘崎でやったという話がない。長崎県が明治二十八年に編纂した「漁業誌」にー南洋沖縄、薩摩等ヨリ漸次北降シ壱岐或ハ対馬海ニ其間数百里ノ洋中ヲ往返疾走シ魚ノ湧出スルヲ見レハ直ニ船ヲ止メ帆ヲ下シテ釣獲スーとあるようにカツオが大群で北上するのは壱岐、対馬の線くらいまでなのかもしれない。

鯛の一本釣が古くから盛況であるのは、現在でも沖ノ島周辺が北部九州における最大の産卵場であるところから見てもうなずける。

(註二)また、明治年間、福岡県の代表的釣漁は、明治十一年福岡県編纂の「福岡県漁業誌」によれば筑前国の部に

鰆鰤挽緒(さわら、ぶり) 鱸挽緒(すずき)鳥賊釣、鯖釣、小釣、竿釣、と記載されている。

ー◇ー◇ー

註一、「日本水産捕採誌」は鰤撫釣を次のように記している。

ー九州地方に於ける鰤釣の季節は陰暦八月より翌年四月に至る其撫鉤は餌料を用ひず専ら擬餌鉤のみを用ゆるものにして長さ三尋許の竹竿の先きに二尺五寸許の緡絲を垂れ其末に擬餌鉤を付け岬頭或は瀬上より之を投下し水面を左右へ撫るが如く振り廻はせは鰤は海面に躍り出て擬餌鉤を一嚥するを直ちに釣り揚け捕獲するなり其水面を撫るが如く振り廻せば鰤は海面に躍り出て擬餌鉤を一嚥するを以て直ちに釣り揚け捕獲するなり其水面を撫るが如く為すを以て撫釣の名を得たるなりー

大島捕鯨資料 その四

表紙

大島捕鯨商社規則 完
商社控

大島捕鯨商社規則

第一章 惣則

第一条 本社ノ名称ハ大島捕鯨商社ト唱ヒ捕鯨ヲ以テ専業トス

第二条 本社ノ性質ハ責任有限商社トス

第三条 本社ハ常ニ福岡県筑前国宗像郡大島村六百拾八番地ニ設置ス

第四条ニ捕鯨場所ハ大島村沿島ノ海上ニ於テ其業ヲ施ス者ナレバ本村人民ノ証諾ヲ得管轄庁ノ指揮ヲ受クベキ事

第五条 本社ノ資本金額ハ金三千円ト定メ之ヲ三十株トシ金壱百円ヲ一株トナシ本村人民ニ限リ募集スベキ事

第六条 本社ノ営業ハ開業ノ年ヨリ向三箇年ヲ以テ一期トス株主タルモノハ何等ノ事故アルトモ期限中ハ其出金ノ請求ヲ免ルルヲ得ズ

第七条 本社ノ株主ハ営業事務ノ妨ナキ時間ヲ以テ本社ノ諸帳簿ヲ披閲スル事ヲ得ベシ但シ主任ノ承諾ヲ得ルモノトス

第八条 本社規則実施ノ上若シ不都合ノ廉アレバ惣会ニ付シテ之ヲ改正協議スル時ハ県庁ノ許可ヲ受クルモノトス

第二章 株式

第九条 本社ノ株券ハ一株一葉ニシテ其出金ノ都度之ヲ記入シ壱百円ヲ以テ限リトス売買譲与スト雖モ本社ハ従来ノ名義人ヲ以テ出金ヲ請求スベシ

第十条 前条ニ戻リ売買譲与スト雖モ本社ハ従来ノ名義人ヲ以テ出金ヲ請求スベシ

第十一条 株券ヲ毀損シ或ハ紛失セシトキハ其趣ヲ明瞭ニ記載シ保証人連署ノ書面ヲ以テ書換ヲ請フベシ

株券左ノ如シ

大島捕鯨本社株券之証
株主 何之誰
一金壱百円也
内 何十円 何ヨリ何ヘ更ヘ候
何十円 同 断
大島捕鯨商社印

第三章 会計

第十二条 毎年五月ヲ以純益金配当ノ定期トス

第十三条 本社ノ利益ヲ以社費一切ヲ支弁シ残余ヲ純益トナス其配賦定例左ノ如シ

純益金何千円
内
金何百円十分ノ一積立金
金何百円十分ノ一発起役員賞与
并浦受料
金何千円十分ノ八株主配当

第十四条 本社純益金ノ配当損害ノ割賦等ハ総テ株式台帳ニ拠リソノ株高ニ応ジテ之ヲ分賦スベシ

第十五条 難船若シクハ非常ノ災害ニ罹リ損失ヲ生ジタルトキハ其次年ノ起業ハ積立金ヲ以テ之ニ充ツベシ

第十六条 本社満期解散若シクハ株主一同ノ都合ニヨリ解社スルトキハ本社一切ノ財産ハ株高ノ多少ニ応ジ株主一同ニ配当スルモノトス

第四章 役員

第十七条 本社ノ役員ト称スルモノ如左

社長 一員 監事 一員
会計 三員 書記 二員

但シ社長監事会計ハ株主即チ社員一同ノ協議ヲ以テ株主中ヨリ撰挙スベシト雖モ書記ハ社長ノ特選トス

第十八条 社長ハ本社全体ノ事務ヲ総括シ役員及ビ雇丁ヲ奨励シ専ラ社業ノ隆盛ヲ謀ルベシ

第十九条 監事ハ社長ヲ補翼シ本社ノ一切ノ事ヲ監査シ社長不在ノ時ハ其事務ヲ代理スベシ

第二十条 会計ハ出納百般ノ事ヲ管理シ書記ハ社長監事会計ノ指揮ニ随ヒ本社ノ庶務ヲ司ル

第二十一条 本社役員ノ給料如左

役員 月給
社長 純益金何十分ノ何分未定
監事 仝 断
会計 仝 断
書記 仝 断

第二十二条 社長ハ本社一切ノ事務ヲ統理スト雖モ株主総集会ニ附スベキモノト専断施行スベキモノトノ別アリ左ノ如シ

上欵 総集会ニ附スベキモノ

第一 資本金ヲ増減スル事

第二 家屋ヲ営繕シ船舶ヲ製造シ或ハ器械ヲ購求スル等

【新刊紹介】

健保の源流 筑前宗像の定礼

井上隆三郎 著

「健保のルーツはいまから百数十年前の江戸時代に宗像にあった」と論証した研究論文がこの程、一冊の本として発刊された。

この論文は昭和五十一年九月の福岡県医報に発表され以後一年半にわたり連載されたものを、更に校筆を入れ完稿されたものである。

著者の井上隆三郎氏は、宗像町東郷駅前通りで「東郷外科」を開業されている名医師である。この本の著作のきっかけとなったのは、診察にきた患者から聞いた「ジョウレイ」(定礼)という言葉からである。この「定礼」から健保のルーツを求めて、病院長という多忙な身体の中、宗像郡内の地理、古文書、伝承等を求めて郡内取材に当たり、この度、「健保の源流・筑前宗像の定礼」として発行されたのである。

本文は三部に分かれ、第一部は「源点を求めて」、第二部は「定礼百年」、第三部は「定礼の地を訪ねて」となっている。文章には古文書や引用文献が数多く挿入されているが、わかりやすく解説され、又、現代の医療と昔の医療との相違、医療にまつわる逸話等も併記された力作である。是非一読をお進め致します。

定価 一四〇〇円

尚、本書を購読希望されます方は左記へ連絡願います。

記

〒八一一ー三四
福岡県宗像郡宗像町東郷駅前通り
東郷外科
井上 隆三郎
TEL09403⑥4128